

リプライ

中村則弘氏書評『東北タイの開発僧——宗教と社会貢献』

櫻井義秀

初めに、本書を書評対象本とされた『現代社会学研究』編集委員会の諸先生方に御礼申し上げる。中村則弘先生には、本誌上で 2006 年にも拙著『東北タイの開発と文化再編』（北海道大学出版会，2005 年）のご高評をいただいた。再び、中国社会の研究者として独自の視点から含蓄の深い書評をいただけたことに深く感謝したい。

本書は、『宗教研究』（358 号）『社会学評論』（235 号）『宗教と社会』（15 号）の各誌をはじめ、宗教関係・タイ関係の専門誌や新聞等でも数回の書評を受けており、リプライはこれが 5 回目の原稿執筆になる。さすがに本書の内容に関して重複しない内容で応答の文章を書くことはできないと思っていたところ、中村先生の書評にはこれまでの書評とは全く異なる趣の質問がちりばめられており、悲喜交々の心境である。というのも、質問の半分が、本書では直接的に議論の範囲に収めていなかった東南アジアと中国の両大陸部における宗教文化の交流に関するものであり、残りの半分はタイ上座仏教の政治的性格に関わる非常に難しい質問だからだ。

このような質問に答えるのは筆者には正直荷が重い。来年には日本タイ学会が総力を挙げて『タイ事典』（めこん）を刊行することになっている。筆者は宗教分野の編集担当者になっているものの、全 66 項目のうち 7 項目しか執筆していない。カバーできている領域が少ないのだ。タイ研究に限ってみても専門分化が進んでおり、タイと周辺地域にもそれぞれ専門家が生涯のフィールドを抱えて研究している。評者の疑問には、林行夫編著『〈境域〉の実践宗教—大陸部東南アジア地域と宗教のトポロジー』（京都大学学術出版会，2009 年）のような研究書がこたえつつある。

また、タイ上座仏教と政治の関わりについては、石井米雄『上座部仏教の政治社会学—国教の構造』（創文社，1975 年）の古典的名著に加えて、近年は矢野秀武が宗教局による仏教教育から政治と宗教の関係を調査している（矢野秀武「タイ宗教科，中学 3 年，翻訳と解説」世界の宗教教科書プロジェクト『世界の宗教教科書』大正大学出版会）。

これらの諸研究に現時点で筆者が付け加えられる事柄はほとんどない。やは

り、こいつには「飛ぶことも考えてよいのではないのでしょうか。もしかするとここがロードスかも知れませんか」という言葉がふさわしいと思われるかもしれない。しかし、根拠なく語るわけにもいかず、その根拠を持つためにはフィールド調査と文献研究に相当な時間を打ち込める環境に身を置くことが絶対条件となる。残念ながら、この数年学内の管理運営業務に携わることになり、これまでの調査研究をまとめるのがせいぜいという体たらくである。

その限られた仕事に限られた時間を割り振ってなした本書だが、9章の後にもっと議論の展開が欲しかったといわれるのは当然なことで、本書は淡泊すぎた。前半で展開した議論へのフィードバックやら、理論的含意の展開を試みてもよかったとも思う。この部分については、『宗教と社会』(15号)のリプライでまとめておいたのでご参照いただきたい。

「宗教と社会貢献」というテーマでは十分議論を詰められなかったうらみが残った。そこで、筆者は2007-9年にかけて科学研究費基盤研究B「宗教の社会貢献活動に関わる比較文化・社会学的研究」を進めており、筆者自身がカバーしきれない研究領域を20名からの研究会メンバーで補足いただいた。理論的、実践的成果を近々刊行する予定である。

どうも最近言い訳が増えてきたが、言い訳ついでにもう一つ。筆者が理論的含意や広領域における宗教文化への言及に禁欲的だったのはタイ上座仏教に感化されたせいかなとも考えている。筆者がタイの僧侶同様禁欲的だというわけではない。言説や理念・表象といったものにおいて、タイ上座仏教には東アジアにおいて発達した大乘仏教の豊饒さはない。

原始仏教を範型として僧侶と僧団のあり方が規定されている上座仏教では、戒律の変更や教学の自在な解釈、或いは僧団の分派に対する自由度が低い。およそ大乘仏教、特に日本仏教が民俗宗教として習合化したり、信徒組織から新宗教が成立したりしていくような融通はきかないのがタイ仏教である。評者が指摘している精霊崇拜と仏教との関係だが、融合はせずにすみ分けが図られ、農耕儀礼や占い・まじないの領域では精霊祭祀や守護霊(ないしは守護神)崇拜が今でも盛んである。タイ・サンガが統制する上座仏教の役割は、戦前期日本における神道に近く、近代国家の正統性原理として機能し、辺境の地の少数民族の教化をはじめとして、開発教育含めて国民の創造に一役も二役もかったわけである。

タンマユット派はモンクット王(ラーマ4世)創始による宗派であり、モンクット王は呪術的・守護力崇拜的な仏教を近代化したとされる。もう一つのマハーニカーイ派と呼ばれる宗派は、19世紀に複数あった僧団や僧団に属していない森林の遊行僧が国家の宗教政策により合同させられたものである。僧団組

織はタイの官僚制を模したものであるから官製仏教と言えなくもない。日本の僧侶は始まりが官僧であり、私度僧として衆生救済を願った僧や鎌倉仏教の祖師達を経て、明治の太政官布達によって出家者の妻帯が公認された。政教関係はタイ・日本とも複雑である。

中国であれば、儒教・道教・仏教の三つの宗教が混淆しながらも独自の発展を遂げ、さらには共産主義国家により地下に追いやられたキリスト教の教会組織や、邪教（近年は膜拜宗教、意味はカルト）扱いされる法輪功等まで含む多彩で奥行きのある宗教文化が、ある意味で中華帝国の勢力圏外に存在する。これが評者いうところの千年の単位で伝承される民衆の宗教文化なのだが、タイの上座仏教は国の影響（或いは王権の庇護）下にあるといえる。

しかし、だからといってタイの仏教がタイの民衆から遊離しているわけではない。バンコクのエメラルド寺院や名利にのみ黄金の仏塔が輝いているのではなく、地方寺院にも極彩色の布薩堂が建立される。寺院の壮麗さは、仏法僧に帰依し、寺や僧を福田と考えて喜捨を惜しまないタイの人達が寺院や仏像を磨きあげ、綺麗に飾った結果であって、現世利益や来世においてよりよい生まれ変わりを期待する庶民の篤い信仰が反映されている。

寺院の内部に起居する僧侶達の日常生活や精神的世界は至ってシンプルであり、僧は227の戒を守り、僧団の律に従えば僧たりえる。僧侶や僧団としての型を崩しながら、内面の精神性を高めたり思想的展開を図ったり、独特の僧一俗（僧一官／僧一民衆）関係を生み出してきた日本仏教の創造性や大乘仏教の饒舌さと比較すると、タイ上座仏教は簡素なのだ。

筆者が調査対象としてきた東北タイの僧侶達は、雨安居時期のみ寺院に留まり、師を求めて頭陀行をしながら国境も越えて移動し、行く先々の村々で人々の求めに応じて各地で見聞した知識を伝え、獲得したタイ方医療の施術を行った。止観行の瞑想に秀でた僧侶には教えを請う弟子が集まり、威徳と靈験を求める在家信徒が各地から参集した。

このような僧侶の周辺に通過儀礼として出家を行う村人達や、中央の僧団から仏教の標準化と国策への参画（開発の推進）のために派遣される僧侶、及びそれに感化された僧侶達がおり、彼等を地域開発のキーパーソンとして協働した地域開発 NGO があった。

国家による開発主義の実践と伝統的な僧侶の役割に適宜折り合いを付け、村人や訪問者相手に僧侶として社会貢献していこうという東北タイの僧侶達に、筆者は国家、上座仏教、地域政治や経済、人々の日常生活等、様々な問題や局面を観察した。それらをひとつのまとまった物語に回収することは不可能であるし、たいした意味のあることではないと執筆時点から考えてきた。今もその気持ちは変わらない。タイ上座仏教や周辺諸地域の宗教文化に造詣もない筆者

がへたな話をまとめるよりは、できるだけ正確に調査資料を残した方がタイ地域研究者や仏教研究者にとって有益ではないかと思っている。

評者が本書の三分の一を占める資料編にまで目を通し、東北タイの僧侶達の営みを読み込んでくれたことは筆者の本望とするところだった。もう一人、本書の資料編が実に面白いといってくれたのが、筆者の恩師であった米村昭二先生であり、吉備国際大学に移られてから始められた中国調査を思い出されたそう。

さて、タイ政治は混迷の極みにある。本書でもタックシン政治の清算がクーデターでなされたこと、総選挙によるタックシン派の勝利を憲法裁判所という司法による選挙違反や不正な政治・経済活動の摘発という形でしか崩せなかったことは述べている。民主主義市民連合という名の黄色いTシャツを着た人々が首相府と空港を占拠した光景がテレビに流された。彼等は何度総選挙をやっても与党となるタックシン派（北部・東北部の地方で圧勝）に業を煮やし、直接行動で政権の転換を求め、民主党（南部、バンコク都市中間層が基盤）を政権につけた。そうしたら、今度は赤いTシャツを着た反独裁民主同盟を名のるタックシン支持の人々が首相府とアセアン会議会場を占拠して政権に揺さぶりをかけた。

タイ社会において中央と地方、階層間の格差は拡大する一方であり、ポピュリズム政治によって地方の人々や農民を味方に付けたタックシン元首相はタイの既得権益層には目の上のこぶだった。彼は国王の威光や軍の支持をあてにせず、経済政策と政治手腕により国民の支持を得てタイ国を自らの会社のように活用しようとした。保守派は都市中間層とメディア、或いは知識人の力を借りてタックシン首相を政治の舞台から引きずり下ろすことに成功したが、同時に民主主義の基礎となる選挙制度も破壊してしまった。

黄色であれ、赤であれ、都市の労働者や地方の農民が手当もなしに数週間から数ヶ月もデモに加われるはずがない。また、警官が警備にあたる空港やアセアン会場を丸腰で占拠できるわけがない。彼等がアセアンにおけるタイ国の威信や観光産業に与えた打撃は計り知れない。結果的に多くの人々の仕事も奪われることになった。

筆者は市民社会の形成という問題意識を抱きながら東北タイ地域社会の開発を考えてきた。社会の分断を解消し、利害関係を異にする人々や集団が妥協し、連携しうる社会の枠組みをタイ社会も考えあぐねているし、筆者も見通しをつけられないでいる。それにもかかわらず、東北タイの人々は生業に励み、宗教文化に裏打ちされた互助の精神を保ってたくましく生きている。評者のように数世紀のスパンでタイ社会の来し方行く末を考えたことはないが、やるべきこ

とをやる人達が生活していく限り、社会は維持されるのだろう。

自分の持ち場でできる限りのことを少しずつやるだけだと語った僧侶も、淡々と日常の寺務や作務を繰り返しているのだろう。十年前になるが、そうした百名を超す僧侶達を訪ね歩いて僧侶の言葉や実践に接することができたのは実に得難い経験だった。社会の在り方、人の在り方を学んだと思う。そのことを書評のリプライを書くなかで再認識したが、このような機会を与えてくれた中村則弘先生に謝意を表して筆を置きたい。

(さくらい よしひで、北海道大学)

(saku@let.hokudai.ac.jp)